関係性精神療法セミナー

臨床と性愛性

このセミナー・シリーズは、2011 年に第 1 回が開かれ、今年で第 15 回目を迎える。関係精神分析（関係論、関係性理論、関係性精神療法）は、対象関係論、サリバン派、コフート派、間主観性理論、自我心理学などを包括的に含み、現代のアメリカの精神分析の新しい流れを総括するものである。

これまで本セミナーでは、エナクトメント、無意識的空想、治療者の脆弱性、ジェンダー、臨床技法など、精神分析の根幹に関わるテーマを取り上げ、基本に立ち戻りつつ、その考えを再検討してきた。

今年のテーマは「性愛性」である。精神分析において、セクシュアリティとエロティシズムは不思議な位置にある。フロイトが幼児性愛を発見して以来、精神分析は、エロティックな本能を人間の基本的欲求とすることで発展してきた。しかし、自我機能や対象希求性に関する理論が発展する中で、それを人間理解の基盤と考えない人たちも現れた。また最近、性的本質に焦点を当てた論考も増加している(Laplanche, 1997; Green, 1995; Atlas, 2016; Perelberg, 2019; Celenza, 2025)。セクシュアリティとエロティシズムは、不思議な魅力を持って私たちを惹きつけるが、捕まえようとするとするりと逃げてしまい、気がつくと私たちに恐怖や不安を呼び起こす。それはまるで、幻想世界のようである。精神分析の原点ともいえる概念を、関係精神分析はどのように捉えるのだろうか。発表者四人が、それぞれの立場からこのテーマに関する話題提供を行い、参加者とともにこの問題への理解を深めてみたい。吾妻は「性愛性と主観性」、岡野は「男性の性加害性」、富樫は「性愛化された転移」、そして長川は「精神療法における性の氾濫」について話す。初学者にとっても、臨床経験豊かな治療者にとっても、精神分析の治療者としての自分を振り返る上で役に立つだろう。当日は、アンケートなども用い、参加者と積極的に対話を進めていきたいと考えている。

◆参考文献：

吾妻壮著（2018）『精神分析的アプローチの理解と実践』（岩崎学術出版社）

岡野憲一郎著（2016）『臨床場面での自己開示と倫理』（岩崎学術出版社）

Togashi, K. (2008). The romantic fantasy and its vicissitudes : A self psychological reconsideration of “hysterical fantasy” and the eroticized transference. International Forum of Psychoanalysis, 17(4), 240-248.

富樫公一著（2023）『社会の中の治療者―対人援助の専門性は誰のためにあるのか』（岩崎学術出版社）

◆日　　時：令和 7 年 7 月 6 日（日曜日）午前 10 時～午後 3 時
（進行具合により多少の延長も考えられます）

◆開催形態：全面的にオンライン（Zoom）で行う

◆発 表 者：吾妻壮（上智大学）、岡野憲一郎（本郷の森診療所）、富樫公一（甲南大学）、
長川歩美（A&C 中之島心理オフィス）

◆司　　会：岡野憲一郎、富樫公一、吾妻壮

◆受 講 料：5,000 円

◆定　　員：60 名

◆申込方法：下記 URL または右 QR コードよりお申し込みください。
https://forms.gle/BThcw5kxzYCjcCoz8

◆申込期間：令和 7 年 5 月 6 日（火）～6 月 22 日（日）

◆問合せ先：小寺記念精神分析研究財団 事務局　kodera.fps@gmail.com

主催：小寺記念精神分析研究財団